



平成 29 年度文化庁文化芸術振興費補助金
(文化遺産総合活用推進事業)

十日町市歴史文化基本構想

概要版



平成 30 年 1 月

新潟県十日町市

1 歴史文化基本構想の策定について

1. 策定の背景

十日町市は、国内有数の豪雪地帯という自然環境の下、縄文時代から受け継がれてきた地域特有の歴史や文化を有し、多種多様な文化財が分布しています。

十日町市ではこれまで、市の文化財を総合的に網羅した方針や方向性がなかったことから、文化財保護の上で生じた問題に対して個別的な対応にとどまってきました。

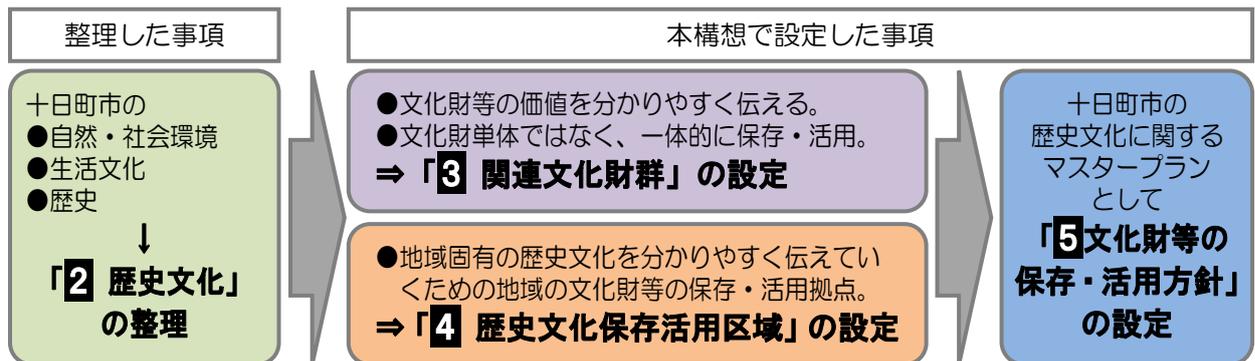
さらに、近年は文化財を取り巻く環境も変化しつつあり、少子高齢化による担い手不足によって、地域に伝わる祭り等の行事の継承が困難になるという問題や、古くから残されてきた由緒ある建築物や古民家などが、所有者の市外転出や積雪期の維持管理上の問題などから、滅失してしまうという状況も発生しています。

一方で、平成 12 年(2000)から開催されている国際芸術祭「大地の芸術祭」の影響もあり、多くの人々が十日町市を訪れ、地域文化に触れることで称賛を得ています。併せて地域の人たちは、地域の素晴らしさを語りだし、もっと地域の良さを知ってもらおうと活動し始め「各地域のアイデンティティを確立し地域の良さを発信したい」という機運が高まってきました。

このような状況から、市域に分布する文化財に関して、各々の関連性や周辺環境も含めて総合的に把握し、計画的に保存・活用していくための総合的な方針や方向性を示すマスタープランとなる「十日町市歴史文化基本構想」を策定しました。

2. 構想の目的と内容

本構想においては、文化財をその指定・未指定に関わらず、歴史的・文化的に価値を有するものとして幅広く捉え、「文化財等」と表現します。地域の歴史や文化の理解に欠くことができない貴重な財産である文化財等を、将来にわたって保存・活用・継承し、歴史文化をまちづくりに生かして地域活性化を図ることを目的に、十日町市の歴史文化の特徴を整理して以下の内容を設定しました。



3. 策定までのプロセスと策定後の進め方

本構想は、学識経験者、関係団体、市関係部局等により構成される「十日町市歴史文化基本構想策定委員会」で検討を行いました。また、検討結果についてパブリックコメントを実施して市民の意見を反映させてとりまとめました。

今後は、本構想で示した方針に基づき、市民の皆様とともに、地域社会の中で、十日町市の文化財等の保存・活用を進めていきます。また、本構想は、十日町市の歴史文化に関わる状況の変化に合わせて見直しを行っていきます。

2 十日町市の歴史文化

1. 十日町市の自然・社会環境の特徴

日本有数の豪雪地

十日町市は、国内有数の豪雪地です。雪国は1年が無雪期と積雪期に二分され、別世界が出現します。最高積雪が2mから3mになる厳しい自然環境の中で、先人達はこの地に住み継いできました。

豪雪が生み出す豊かな水系と河川沿いに広がる河岸段丘

十日町市には、信濃川と渋海川が南北に縦貫し、これに清津川など多くの中小河川が山間地から流れ込んでいます。また、河川による浸食で雄大な河岸段丘が形成されています。

市域を取り囲む豊かな樹林と山の幸

豊富な雪解け水がブナ林等の樹林により水源として貯えられ、肥えた森林腐葉土が棚田を潤しています。山野からは、山菜、キノコ、木の実などの食材が得られ、縄文時代からの食生活を支えてきました。

河川沿いに分布する市街地と丘陵に点在する山村集落

河岸段丘上では、原始から集落が形成されてきました。また、渋海川沿いの山間には集落が点在しており、山村の特徴的な集落景観をみることができます。

南北・東西方向に発展してきた交通網

近世の交通網は、南北方向には信濃川沿いに北国脇街道(善光寺街道)が信越をつなぎ、東西方向には北国街道の高田(上越市)と三国街道の塩沢宿(南魚沼市)を結ぶ松之山街道が通っていました。

雪国の風土や時代のニーズに合わせて発展した織物業

この地域では古くから青芋を使った麻織物が生産され、江戸時代には高品質な麻布「越後縮」の主産地として栄えました。明治時代になると絹織物に移行し、十日町市の代表的な産業である織物業へと発展しました。

河岸段丘や山間地域に展開する稲作

十日町市では、豊富な雪解け水や地形、気候を生かした稲作が行われています。河岸段丘上には江戸時代以降の新田開発による水田が広がり、山間の斜面地には多くの棚田が造られ、蛇行する渋海川流域には川の流れを変えて造られた「瀬替え田」等の特徴的な水田がみられます。



河岸段丘(中里地域)



ブナ林(美人林)



山村の集落景観(小白倉集落)



古道松之山街道



棚田(狐塚の棚田)

2. 十日町市の生活文化の特徴

十日町市の人々は、長くて厳しい冬ごもりの生活に耐え、雪と闘いながらも様々な工夫を凝らし、さらには雪を利用し、楽しみをも生み出してきました。

雪国の生活

豪雪地では、雪を踏み固める「道踏み」や屋根雪を除く「雪掘り」など、生活のために欠かせない作業が多くありました。その一方で、食料の冷蔵やワラ細工等のあく抜き、「越後縮」の漂白などに雪の特性を利用して、生活や生業にも活用してきました。

雪国の食文化

「ダイコ（大根）」は、生食用には「ダイコダテ」で保存し、煮込む、干すなど、様々に加工して利用します。雪国の食文化は、山菜や木の実、鳥やウサギ、川魚などの旬の自然のめぐみを受けながら、長く厳しい冬の間の食料を備蓄するために生みだされた先人達の知恵や工夫によって築られました。

雪国の建物

古い民家などには、一つの建物に馬屋や物置などを取り込むようにした中門造りの様式や、太い柱を用いた造りなど、雪国ならではの様々な工夫を見ることができます。また、雪が降っていても歩行しやすいよう造られた「雁木^{がんぎ}」や、雪崩の危険を避けて移動するための「雪中隧道^{せっちゅうすいどう}」なども雪国特有の施設です。豪雪から生活を守るための知恵や工夫は、克雪住宅などの現代の建築様式などに生かされています。

信仰と祭事・行事

稲作の盛んな十日町市では、稲の成長に合わせて様々な祭事・行事が行われます。小正月にはその年の豊作を願う行事、秋には収穫への感謝の祭りが行われます。それらは、生業などへの祈りであるとともに、人々のくらしの中の楽しみとして継承されています。

伝統文化

雪が降ると家の中が仕事場となり、女性は機織り、男性はワラ仕事をしました。機織りで織られたのは「越後縮」で、この地域は主産地として栄え、現在の織物産業に発展しました。ワラ仕事は、ワラやスグを使って、家族が使う日用品や農耕に使う用具を作っていました。作ったワラ細工や竹細工は「節季市^{せつきいち}」で売られ、貴重な現金収入となりましたが、現在では製作者が減少しています。



豪雪後の雪掘り
(昭和11年、本町3丁目)



ダイコダテ(左下)とダイコ干し(右上)
(昭和30年頃、田中町)



雁木(昭和30年頃、本町2丁目)



節季市

3. 十日町市の歴史

原始・古代

十日町市や周辺地域一帯で人類の活動が始まったのは、河岸段丘上の様々な場所で石器類が出土していることから、後期旧石器時代とみられています。

市域には縄文時代の遺跡が数多くあり、十日町地域の「笹山遺跡」から出土した火焰型土器を始めとする土器群は、平成11年(1999)に縄文土器として初の国宝に指定されました。

古墳時代から奈良・平安時代に及ぶ大規模な集落跡の「馬場上遺跡」からは、糸に撚りをかける時に使われる紡錘車という道具や、織物の圧痕が付いた土器などが出土し、古代からこの地域に機を織る技術があったことが分かっています。

また、松代地域の「松苧神社」は飛鳥時代(7世紀)、十日町地域の「神宮寺」は平安時代(9世紀)に開創されたと伝えられています。



神宮寺観音堂【県指定有形文化財】

中世

鎌倉時代からこの地方に勢力を広めた大井田氏などの越後新田氏一族は、南北朝時代、南朝のために働きました。「大井田城跡」を始め市内に残る城跡・館跡や川西地域に残る板碑の多くは、当地方が越後南朝方の拠点であった当時のものと考えられています。

室町時代のこの地方は、関東管領上杉家の家領でした。越後一国を統一した上杉謙信の時代、居城春日山(上越市)から十日町市内の松代～城之古～六箇を抜け塩沢(南魚沼市)に出て三国街道に至る経路は「松之山街道」と呼ばれ、関東へ抜ける軍用道路として重要視されました。この街道の要所には多くの要害城が築かれています。松代地区の街道の一部は「歴史の道百選」に選定されており、松苧神社には、上杉謙信が奉納した「軍配」など、室町・戦国時代の遺品も残されています。



軍配【市指定有形文化財】

近世

古代から越後の国で織られていた高品質の麻織物は、江戸時代になって「越後縮」へと発展し、武家の式服に採用されて需要が高まりました。主産地の十日町には縮市場が開設され、取引の中心地として栄えました。江戸時代の末、宮本茂十郎がこの地域に絹縮と高機を伝え、生産される織物は麻から絹に急速に移行しました。

江戸時代には農業技術も進み、新田開発が各地で盛んに行われました。生産力向上と縮商いの繁盛を背景に、文人墨客の往来も盛んになり諸文芸が発達しました。特に俳諧の普及ぶりは市内各地の社寺に残されている献額にみることができます。

近代・現代

明治に入ると織物業は工場制工業へ発展、大正から昭和初期に一世を風靡した「明石ぢぢみ」や、「意匠白生地」を開発して十日町の絹織物産地としての確固たる地位が築かれました。第二次世界大戦後には「十日町小餅」「マジョリカお召」「黒絵羽織」など次々と新商品を開発し、織りと染めの総合産地体制が確立しました。

平成12年(2000)から、中魚沼地方と、ほくほく線で結ばれた松之山郷が一体となり、里山と現代アートの融合をテーマにした「大地の芸術祭」が始まりました。平成17年(2005)4月、これらの地域の交流を経て、十日町市、川西町、中里村、松代町、松之山町が合併して新十日町市となりました。



大地の芸術祭で設置された芸術作品
(草間彌生「花咲ける妻有」)
草間彌生「花咲ける妻有」 Photo by Osamu Nakamura

4. 十日町市の歴史文化の特徴

豪雪とともに生きてきた人々の知恵が育んだ歴史文化

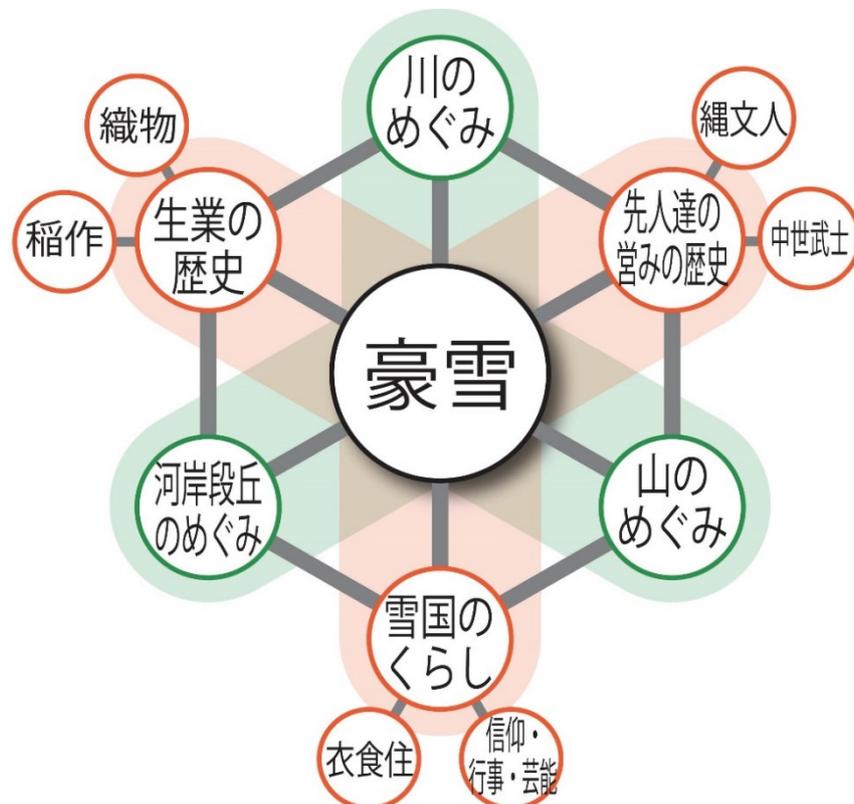
～縄文時代から受け継ぐ「豪雪と共に生きる暮らし」「豪雪を友とするところ」～

縄文時代の温暖化によってこの地に大量の降雪がもたらされるようになったのは、今から8,000年前頃とされています。冬の到来とともに豪雪の中での生活を余儀なくされた人々は、雪に対する鋭い感覚を身につけ、様々な工夫を凝らして生き抜いてきました。雪を受け入れ、雪を活用して命をつなぎながら、雪に親しみ、やがて雪の中に楽しみをも見出すようになりました。

このような、豪雪と共に生きる暮らし方と、豪雪を友とする精神は、縄文時代から現代の十日町市へと脈々と受け継がれています。

「豪雪」とともに生きてきた十日町市の歴史文化は、「豪雪が生んだ自然環境」と、「豪雪の中で育まれた歴史文化」によって、その特徴を語る可以考虑（右の表）。「豪雪が生んだ自然環境」は、歴史文化を生み出した基盤である「川」「河岸段丘」「山」から成り、その自然環境の下「豪雪の中で育まれた歴史文化」が「先人達の営みの歴史」「生業の歴史」「雪国の暮らし」です。

それらの特徴は、それぞれが独立して成立してきたのではなく、自然環境と歴史文化が織りなす雪の結晶のように、「豪雪」を中心に互いに関連しながら、下図のように十日町市の歴史文化を形成してきました。



十日町市の歴史文化の特徴の模式図

十日町市の歴史文化の特徴

<p>①豪雪が生んだ自然環境 (人々の生活にめぐみをもたらす豊かな豪雪地の自然環境)</p>	川のめぐみ	<p>十日町市の中心を流れる日本一の大河信濃川や清津川、渋海川などの、雪がもたらす豊かな水のめぐみ</p> <ul style="list-style-type: none"> ●信濃川：かつての川漁、舟運（荷船・渡し船）から現代の水力発電など、十日町市の生活や産業の中心となってきた信濃川 ●山間の溪流：山間地域の稲作を支える渋海川や、清津峡<small>きよつきょう</small>や田代の七ツ釜<small>たしろのななつがま</small>に代表される峡谷の景勝地
	河岸段丘のめぐみ	<p>中山間地域の町場の生活や稲作等の生業の場として、貴重な平地となる信濃川流域に発達した河岸段丘のめぐみ</p>
	山のめぐみ	<p>十日町市の東側と西側に連なる丘陵の山々のめぐみ</p> <ul style="list-style-type: none"> ●山の幸（山菜・木の実）：雪消えとともに山野に自生する山菜や、ブナやヤマグワ等の食用の木の实など、豊かな山林が生み出す山の幸 ●水源涵養：ブナ林等の落葉広葉樹林の日陰が融雪を遅らせることによる豊かな水源や肥えた森林腐葉土の形成
<p>②豪雪の中で育まれた歴史文化 (雪国の先人達の営みの歴史と時代の変遷とともに変化しつつ受け継がれてきた生活文化)</p>	先人達の営みの歴史 (縄文人と中世武士)	<p>雪国で始まった縄文人のくらしと、中世武士の戦い</p> <ul style="list-style-type: none"> ●縄文人のくらし：国宝・火焰型土器が出土した笹山遺跡に代表される、数多くの縄文時代遺跡や出土品からうかがえる縄文人の豊かなくらしの歴史 ●中世武士の戦い：越後南朝の拠点となった鎌倉から南北朝時代や、上杉謙信の関東経営のための交通や要害の場所であった室町から戦国時代の地域の歴史
	生業の歴史 (織物と稲作)	<p>雪国で発展した織物と稲作</p> <ul style="list-style-type: none"> ●織物業：古代から現代まで、気候風土を生かし時代のニーズに合わせて発展した織物業の歴史 ●稲作：棚田やマブ、瀬替え等の山間地域の稲作、河岸段丘の平地を中心に拡大した稲作等、地形を生かして発展した米どころの歴史
	雪国のくらし (衣食住と信仰・行事・芸能)	<p>受け継がれる雪国の生活文化</p> <ul style="list-style-type: none"> ●雪国の衣食住：半年余りに及ぶ雪に囲まれた厳しい生活の中で、雪を受け入れ、雪を利用してきた人々のくらし ●雪国の信仰・行事・芸能：米どころとしての秋の収穫の歓びと、冬の豊穣の祈りや楽しみ、伝統文化

3 十日町市の関連文化財群

「関連文化財群」とは、有形・無形、指定・未指定に関わらず、様々な文化財等を歴史的・地理的関連性に基づき一定のまとまりとして捉えたものです。

関連する複数の文化財等を一体的に保存・活用していくことや、十日町市の歴史文化の特徴や文化財の価値を分かりやすく魅力的に伝えていくことを目的に、以下の考え方で5つの物語から成る関連文化財群を設定しました。

今後も、これらの関連文化財群を充実させていくために、新たな物語の追加などを検討していきます。

<関連文化財群の設定の考え方>

- 歴史文化の特徴に基づき、縄文時代から受け継ぐ「豪雪と共に生きる暮らし」「豪雪を友とするところ」をテーマに関連文化財群を設定する。
- 価値を分かりやすく伝えていくために、関連文化財群を歴史文化の特徴を語る「物語」として捉え、「物語」ごとにエピソードを紹介する。

十日町市の関連文化財群

テーマ	関連文化財群		概要	エピソード
「豪雪と共に生きる暮らし」	物語1	雪国に住み継ぐ人々 ～実は豊かだった豪雪地～	豪雪地に住み継いできた人々の歴史や、その過酷な環境の中で自然と共生する先人達が生み出し、時代とともに発展・継承されてきた知恵や工夫の物語。	<ul style="list-style-type: none"> ●雪と共生した縄文人 ●地形を活用した中世武士の戦いと祈り ●雪と闘う人々の知恵や工夫
	物語2	雪国の冬仕事 ～雪ありて縮あり、 雪は縮の親～	豪雪地の長い冬の間、家の中で女性は機織り、男性はワラ仕事をして、春の訪れを待った。その冬仕事から市の産業として発展した織物業や、伝統的に引き継がれてきた道具や技術の物語。	<ul style="list-style-type: none"> ●女の冬仕事 機織りと織物業 ●男の冬のワラ仕事
	物語3	雪国の食生活 ～ダイコとコーユ、 ツケナとニーナ～	豪雪は、春には清冽な水となって流れ、山や耕地を豊かに潤し、そこからは豊富な山や川の幸が生み出される。それらを生かしてきた先人達から引き継ぐ雪国の食生活の物語。	<ul style="list-style-type: none"> ●山や川のめぐみを生かした郷土料理 ●山と河岸段丘の稲作
「豪雪を友とする暮らし」	物語4	雪国のごったくと ごつつお <small>だいたいこたね</small> ～めでたいものは大根種～	厳しい豪雪地での人々の暮らしの中の楽しみとして引き継がれてきた行事、風習等の物語で、稲作の盛んな十日町市では、稲の成長に合わせた豊穰・豊作への祈り等、生業などとも関連する。	<ul style="list-style-type: none"> ●豊穰の祈り（冬から春の行事） ●収穫の歓び（夏から秋の行事） ●雪国の遊び
	物語5	雪国の美 ～豪雪が育む大地の芸術～	豪雪が生んだ自然環境がもたらす豊かで変化に富んだ美しい景観や、縄文時代から豪雪の中で育まれた歴史文化の中で研ぎ澄まされて、引き継がれてきた先人達の美の感覚の物語。	<ul style="list-style-type: none"> ●自然の美 ●美の系譜

豪雪地での厳しい生活の中で、先人達は「豪雪」とともに生きる方法を身につけ、「豪雪」の様々なめぐみを受けながらこの地に住み続けて、歴史を積み重ね、文化を培ってきました。

豪雪の中での人々の生活は縄文時代から始まっています。河岸段丘上の縄文時代の集落跡、山頂の要害城跡や平場の居館跡等の中世の遺跡などから、自然と共生する先人達の知恵や工夫をうかがい知ることができます。生活のあり方は時代とともに大きく変化しながらも、それらの知恵や工夫は、今に伝わる文化財や、現代の生活、建物様式に見ることができます。

●雪と共生した縄文人

十日町市は、中里地域の「なかばやしせいせき中林遺跡」「たざわ田沢遺跡」「じん壬遺跡」などの縄文時代草創期(約1万6000年前～1万1000年前)の遺跡を始め、国宝・火焰型土器が出土した十日町地域の「かざやま笹山遺跡」(縄文時代中期)など、1万5000年以上続く縄文時代の全ての時期の遺跡が数多く立地することで全国的にも有名な地域です。

遺跡の出土品からは縄文時代の人々のくらしぶりを知ることができます。山や川のめぐみを受け、四季折々の食材を土器で煮炊きするなど豊かな食生活を送っていました。また、長く厳しい冬に備え、食物を保存加工して貯蔵する知恵と技術を編み出しました。

縄文人にとって、自然は信仰の対象でもありました。「かざやま笹山遺跡」や「のくび野首遺跡」などから出土した「火焰型土器」は、特殊な形状や文様、出土量の少なさから、祭祀用の煮炊きの器とも考えられています。

●地形を活用した中世武士の戦いと祈り

鎌倉時代から南北朝時代に、この地方に進出した大井田氏を中心とする新田氏一族は、元弘3年(1333)の新田義貞の倒幕挙兵に真っ先にはせ参じて以来、南朝のために働き、この地域は越後南朝の拠点となりました。「大井田城跡」や「ふしぐろじょうせき節黒城跡」、「つぼのかんせき坪野館跡」を始め、市内にある約40か所の城跡や館跡の多くは、その当時のものと考えられています。

室町時代のこの地域は、関東や信濃に接する国境付近の大変重要な地域でした。春日山城(上越市)から十日町市内を抜けて塩沢(南魚沼市)の三国街道に至る松之山街道が通り、市域内の街道の要所には「むろのじょうせき室野城跡」「まつだい松代城跡」「いぬぶし犬伏城跡」「びわがら琵琶懸城跡」「はねがわ羽川城跡」など多くの城跡があります。

松代地域の「松茸神社」は、戦国時代には上杉謙信などの戦国武将が祈願所として信奉し、室町・戦国時代の遺品も残されています。川西地域を中心に市内に残る「板碑」は中世の石造供養塔の一種で、その多くは南北朝時代に造られたものです。これらの市域に残された中世の文化財からは、戦乱の世に生きた武士の生活や信仰の様子をうかがい知ることができます。

●雪と闘う人々の知恵や工夫

この地域では、雪に埋もれた長く厳しい冬を凌ぐための様々な知恵と工夫が培われてきました。

「十日町の積雪期用具」は、秋の冬支度から始まり、雪との闘い、雪の中での日常のくらしや社会生活、春の消雪に至るまでの雪国の生活と心情を物語る3,868点の用具類です。

「ほしなけしゅうたく星名家住宅」(川西地域)の主屋は、豪雪に耐えるための様々な工夫を見ることができる江戸時代後期の建造物です。また、「雁木(アーケードの前身)」、雪の保冷機能を利用した「ほしなけしゅうたくゆきあな星名家住宅雪穴」や「小谷長者原の雪による蚕卵冷蔵施設」、雪崩の危険を避けるための「雪中隧道」なども雪国特有の施設です。そのほか、家屋や樹木を雪から守るための「雪囲い」、新雪を踏んで道をつける「道踏み」、屋根雪を除く「雪堀り」など、冬の風習や道具に込められた先人達の知恵や工夫は現代の生活にも継承されています。



笹山遺跡【市指定史跡】



長徳寺板碑
【市指定有形文化財】



星名家住宅雪穴【国登録有形文化財】

物語2 雪国の冬仕事 ～雪ありて縮あり、雪は縮の親～

雪国の積雪期、家の中の「冬仕事」で代表的なものは、女の機織りと男のワラ仕事でした。

近世越後を代表する織物「越後縮」は、雪国の女たちが発展を支えました。豪雪の気候風土と、雪に閉ざされる生活から生まれた織物の歴史は、時代のニーズを反映しながら現在の十日町市の織物産業へとつながっています。ワラ仕事は、自給自足の生活を送る雪国の農家では大切な仕事でした。

●女の冬仕事 機織りと織物業

十日町市の織物の歴史は古く、「城之古遺跡」(弥生時代)などの遺跡から糸に撚りをかける紡錘車が出土しています。古代から中世まで越後で織られた麻織物は「越後布」などと呼ばれ、江戸時代には「越後縮」が誕生し、武家の式服に採用されて需要が高まりました。江戸時代の末には絹織物の生産へ移行し、「明石ちぢみ」は大正時代から昭和初期にかけて看板商品となりました。第二次世界大戦後の十日町の織物業は次々と新商品を開発し、織りと染めの総合産地体制が確立しました。市内には、機織りと織物業の歴史に関わる資料等が数多く残されています。

●男の冬のワラ仕事

雪深い冬の間、シロ(いろり)端では、農家の男たちが、スッポン・ワラグツ等の履物、ナワ等の農耕用具、ミヤザル等の竹細工の製作に精を出しました。親から子へと伝えられたその技術は、「十日町の積雪期用具」等の文化財として保存されています。市内では「新水のドウラクジン」や「大白倉のバイトウ」等のワラが欠かせない行事も継承されています。



越後縮の紡織用具及び関連資料(一部)
【国指定重要有形民俗文化財】



十日町の積雪期用具(一部)
【国指定重要有形民俗文化財】

物語3 雪国の食生活 ～ダイコとコーコ、ツケナとニーナ～

初雪の降る頃、冬支度として「ツケナ(野沢菜漬)」を大量に漬け込みます。冬の間は副食やお茶請けとして食べ、春頃に酸味が増すと煮込んで「ニーナ(煮菜)」にします。「ダイコ(大根)」は古くからの大切な野菜で、生食用には「ダイコダテ」で保存し、煮込んで「ダイコニ(大根煮)」、干して「コーコ(沢庵漬)」にするなど、様々に加工して利用しました。このような長い冬を凌ぐための知恵や工夫が生んだ雪国の食文化は現在も継承されています。

●山や川のめぐみを生かした郷土料理

雪が消えると人々は競って山菜採りに出かけます。山菜は、春を迎える喜びとともに味わう特別なものです。旬の自然のめぐみを楽しみ、冬に備えて加工・保存する食生活は、縄文時代から行われてきました。その知恵と工夫が生んだ食文化が、郷土料理として各家庭の日々の暮らしの中で引き継がれています。

●山と河岸段丘の稲作

十日町市の河岸段丘の肥沃な台地には、江戸時代に用水がひかれて以降新田開発が進められ、水田が広がっています。松代・松之山地域などの山間地域には、山間や谷間の斜面地に多くの棚田が造られています。山間の複雑な地形を流れる渋海川流域には、川の流れを変える「瀬替え」や山にトンネルを掘って川の流れを引き込む「マブ」等の農地開発で旧河道に造られた特徴的な水田がみられます。十日町市では、地形や気候を生かした様々な方法で稲作が行われ、十日町市で収穫される「十日町産魚沼コシヒカリ」は、全国的に人気のある米となっています。



郷土料理(コーコやツケナ)



瀬替えにより整備された水田

「ごったく」は行事、「ごっつお」はご馳走を意味する十日町市の方言です。「めでたいものは大根種」は、この地方の祝い唄「天神ばやし」の歌詞で、古くから婚礼、祭り、集落行事等で唄われてきました。

稲作の盛んな十日町市では、稲の成長に合わせた四季折々の祭りが集落ごとに呼び名や風習を変えて行われてきました。特に冬場には豪雪地ならではの独特な祭りや風習があり、現在も継承されています。

●豊穣の祈り（冬から春の行事）

冬から春にかけて、正月、小正月、春彼岸など、無病息災やその年の豊作を願う様々な年中行事が行われます。小正月の「新水のドウラクジン」「大白倉のバイトウ」では「天神ばやし」が唄われ、煙や炎でその年の豊凶占いをします。そのほか「婿投げ・スミぬり」など、雪国ならではの行事が現在も行われています。



大白倉のバイトウ

●収穫の歓び（夏から秋の行事）

秋には、各地の神社で行われる豊穣への感謝の祭りを始め、雪国の短い夏から降雪前までのつかの間の休みを楽しむ様々な行事が行われます。諏訪神社すわの秋季大祭が発展した「十日町おまつり」や、田を潤す渋海川で体を清めて神輿を担ぐ松茸神社の「犬伏裸祭り」、豊作を祝う舞が奉納上演される十日町赤倉の鎮守十二社の祭礼「赤倉神楽」などの様々な祭事が各所で開催されます。



雪原のソリあそび(昭和 32 年)

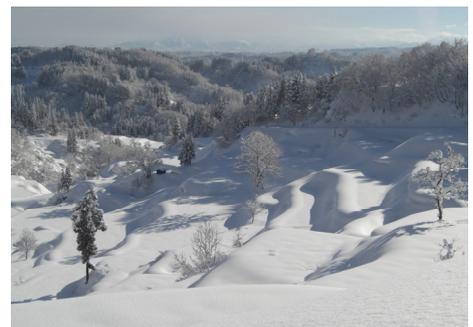
●雪国の遊び

子供たちは、雪晴れの日には雪だるまづくり・ママゴト・竹スキー・ソリ・ガチ等、雪を使って遊びました。この雪を楽しむというところは、「雪を敵とせず、友としよう」と始まった「十日町雪まつり」など、市内各地の冬のイベントに引き継がれています。

十日町市の豊かで変化に富んだ自然は、峡谷等の自然景観をもたらし、そこでの人々の営みは棚田等の文化的景観を形成しています。また、火焰型土器や、古い織物の歴史の中で生み出されてきた着物などには、豪雪地の生活の中で研ぎ澄まされてきた先人達の美への感覚が表れています。そして、美しい里山は、現代美術の国際芸術祭「大地の芸術祭」の舞台となっています。

●自然の美

中里地域の「清津峡」「田代の七ツ釜」には峡谷や溪流の絶景を求めて多くの人々が訪れます。「にほんの里百選」に認定された松之山・松代地域などに広がる「棚田」や、松之山地域の「美人林」などのブナ林の風景は、豪雪地の先人のくらしの歴史を物語るとともに、多くの人々の心を魅了しています。



棚田（蒲生の棚田）

●美の系譜

十日町市の美の系譜は、縄文時代に始まります。大仰な4つの突起を持つ火焰型土器を見て、そこに美を発見した芸術家・岡本太郎おかもとたろうは「なんだ、コレは！」と驚愕しました。雪国の風土を生かし、時代のニーズに合わせて発展した機織りや織物業の歴史は、麻から絹へ、織物から染め物へと広がり、洗練され、研ぎ澄まされて美しい着物を生み出してきた美の歴史でもあります。

雪に閉ざされた長い冬の白一色の世界から色彩豊かに移り変わる四季の中で、先人達が育ててきた美意識は、昭和 25 年(1950)から始まった「十日町雪まつり」の市民による雪像製作などにも引き継がれています。



火焰型土器

4 十日町市の歴史文化保存活用区域

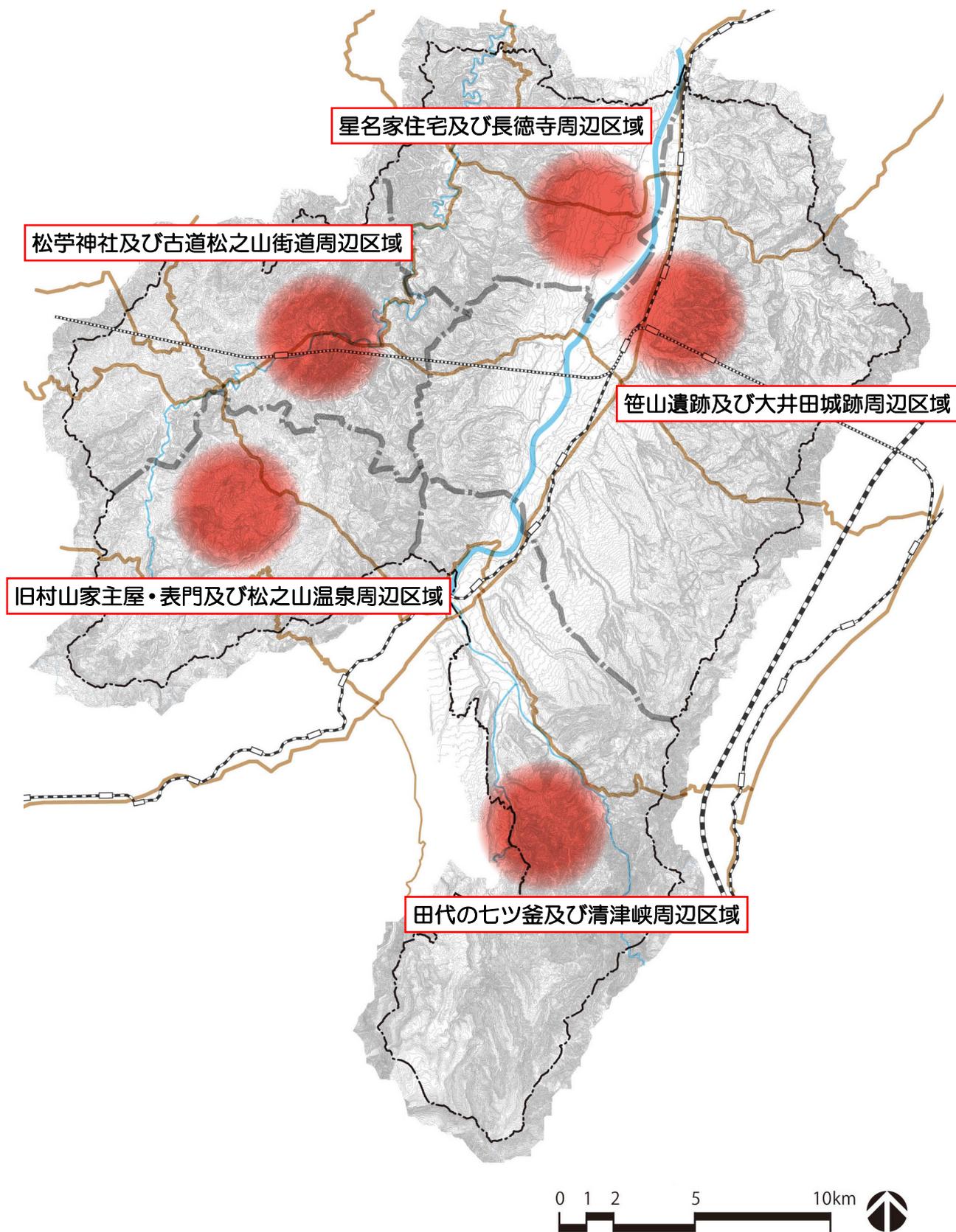
「歴史文化保存活用区域」は、地域の文化財等の確実な保存を図り、地域固有の歴史文化を分かりやすく伝えていくための地域の文化財等の保存・活用の拠点となる場所です。

＜歴史文化保存活用区域の設定の目的＞

- 文化財単体では成しえない、区域内の文化財相互の有機的な繋がりを体験・体感できるように歴史文化の保存や活用を推進する。
- 市民にとっては、自分達がくらす地域の歴史文化に関心を持ち、誇りに感じ、守り伝えていく大切なものとして理解し、文化財保護の意識を醸成する。
- 十日町市を訪れる人々にとっては、地域の歴史文化を伝え、地域を巡ってもらおうきっかけとなる（十日町市博物館から保存活用区域に向かい、市域を巡っていただく）。

歴史文化保存活用区域	概要	
笹山遺跡 及び 大井田城跡 周辺区域	縄文時代の集落跡の笹山遺跡【市指定史跡】や、「大井田十八城」と呼ばれる城跡群の中核となる大井田城跡【県指定史跡】を中心に、南方に広がる区域で、十日町市の原始及び中世の歴史に関連する文化財が集積しています。（右写真：大井田城跡）	
星名家住宅 及び 長徳寺 周辺区域	星名家住宅【国指定重要文化財】と長徳寺を中心に、北西の節黒城跡【市指定史跡】に広がる区域で、近世から近代の十日町市の雪国の生活様式を伝える建築物や、中世の山城跡、板碑等の文化財が集積しています。（右写真：星名家住宅）	
田代の七ツ釜 及び 清津峡 周辺区域	田代の七ツ釜と清津峡【いずれも国指定名勝・天然記念物】を中心に清津川・釜川下流の北方に広がる区域で、区域内には、十日町市の豊かで特徴的な自然環境を示す天然記念物や景勝地等の名勝関係の文化財が集積しています。（右写真：田代の七ツ釜）	
松苧神社 及び 古道松之山街道 周辺区域	松苧神社本殿【国指定重要文化財】と古道松之山街道を中心とした区域で、中世から近世における越後の領土支配に欠くことができない重要な場所であったため、関連する文化財が山中、山麓、街道沿いに集積しています。（右写真：松苧神社本殿）	
旧村山家主屋・表門 及び 松之山温泉 周辺区域	南北朝時代に関湯伝説を持つ松之山温泉や、近世に松之山郷南組の大庄屋を務めた村山家の旧村山家主屋・表門【市指定有形文化財】を中心とした区域で、区域内には、松之山地域特有の歴史や伝統を伝える文化財が集積しています。（右写真：旧村山家主屋）	

本構想では、先行して地域の文化財等の保存・活用の拠点整備を推進する区域として5つの区域を設定しました。区域については、構想策定後の調査・研究の進展や地域のまちづくりの進行状況に合わせて追加を検討し、今後も市域に保存・活用の拠点を増やしていきます。



歴史文化保存活用区域の位置図

5 十日町市の文化財等の保存・活用の方針

十日町市の文化財等の保存・活用について目標と基本方針を設定し、それらの実現に向けて取り組んでいく方策を以下のようにまとめました。

<保存・活用の目標>

豪雪とともに生きてきた人々の知恵が育んだ歴史文化の証となる文化財等を「地域の財(たから)」として、人々のくらしの中で保存・活用して、後世に継承していく。

<保存・活用の基本方針>

- 「地域の財(たから)」の適切な保存により、後世に継承していく。
- 「地域の財(たから)」の普及啓発に努め、市民を始め多くの人々に理解してもらう。
- 「地域の財(たから)」の地域社会の中での保存・活用を推進していく。

● 「地域の財(たから)」の適切な保存

豪雪とともに生きてきた先人達の営みの歴史の証や、現在の生活にも引き継がれている文化を、「地域の財(たから)」として後世に継承していくために、文化財等の適切な保存を実施していきます。

方 策	①文化財等の保存の推進	<ul style="list-style-type: none"> ■ 「十日町市指定文化財」の積極的な指定 ■ 民俗芸能・風俗慣習の保存・継承 ■ 防災対策の推進 ■ 文化財等の収集と収蔵施設の整備 ■ 文化財等の保存に必要な財源の確保
	②調査・研究の継続	<ul style="list-style-type: none"> ■ 調査・研究の継続と情報の蓄積 ■ 調査・研究体制の整備
	③保存整備と技術者・資材確保の推進	<ul style="list-style-type: none"> ■ 計画的な保存・活用の実施 ■ 保存技術の継承と資材確保

● 「地域の財(たから)」の普及啓発

十日町市の歴史や文化の物証となる文化財等を、大切な「地域の財(たから)」として市民が理解し、継承していく意識を醸成するために、積極的な普及啓発を推進していきます。

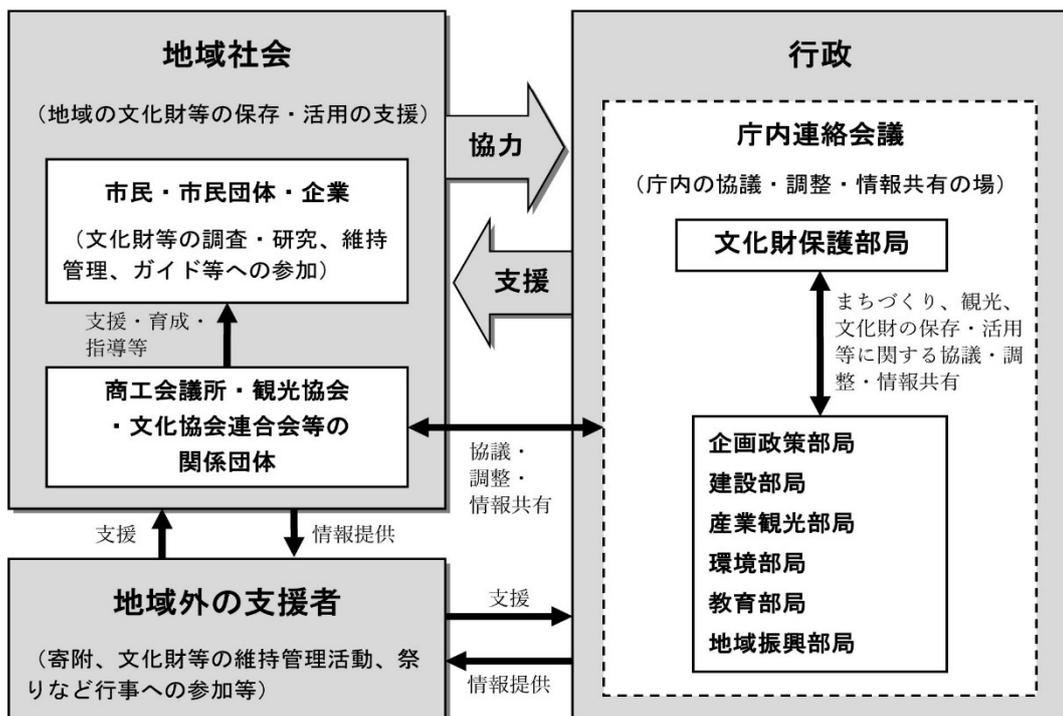
方 策	④博物館・資料館を通じた文化財等の活用	<ul style="list-style-type: none"> ■ 博物館・資料館と文化財等を関連付けた活用 ■ 博物館・資料館間の連携強化
	⑤学校教育・社会教育との連携	<ul style="list-style-type: none"> ■ 文化財等を活用した学校教育・生涯学習の充実 ■ 他の教育機関との連携体制の強化
	⑥一般公開の推進	<ul style="list-style-type: none"> ■ 文化財等に関する情報発信の推進 ■ 適切な公開の推進 ■ 公開に向けた民間との連携強化

方 策	⑦関連文化財群の保存・活用の推進	<ul style="list-style-type: none"> ■関連文化財群を構成する文化財等の確実な保存 ■新たな関連文化財群の構築に向けた調査・研究の継続 ■関連文化財群に関連する文化財等の普及啓発と公開活用 <ul style="list-style-type: none"> ・学校教育や生涯学習への関連文化財群の活用 ・関連文化財群を巡るルート等の設定
	⑧地域の文化財等の保存・活用の拠点整備の推進	<ul style="list-style-type: none"> ■文化財等の保存と関係部局との連携による環境の向上 <ul style="list-style-type: none"> ・文化財等の修理・修復 ・関係部局との連携による環境の向上 ■観光面を考慮した活用のための整備の推進 <ul style="list-style-type: none"> ・情報提供や案内、交通等に係るサービスの充実 ・拠点施設の整備 ・十日町市博物館との連携システムの構築 ■歴史文化保存活用区域の追加に向けた検討 <ul style="list-style-type: none"> ・調査・研究の推進 ・区域追加に向けた検討

●「地域の財(たから)」の地域社会の中での保存・活用

市民自らが文化財等を保存・活用し、自分達が生活している地域の誇りとして後世に継承していきけるための体制づくりを推進していきます。

方 策	⑨地域社会と行政の連携・協働に向けた体制づくりの推進	<ul style="list-style-type: none"> ■行政内での相互連携体制の構築 <ul style="list-style-type: none"> ・文化財課の体制の充実 ・庁内連携体制の構築（庁内連絡会議の設置） ■地域社会の中で保存・活用していくための体制の構築 <ul style="list-style-type: none"> ・市民、市民団体、企業が参画する仕組みづくり ・地域外からの支援受け入れのための仕組みづくり
--------	----------------------------	---



地域社会の中で文化財等を保存・活用していくための体制のイメージ図

表紙の写真

①	②	①清津峡【国指定名勝・天然記念物】
③	④	②婿投げ【市指定無形民俗文化財】
		③節季市で売られるチンコロ （縁起物のしん粉細工）
		④蒲生の棚田

十日町市歴史文化基本構想 概要版

- 発行 平成30年3月 新潟県十日町市
- 編集 十日町市教育委員会事務局文化スポーツ部文化財課
〒948-0072 新潟県十日町市西本町1丁目382番地1
TEL 025-757-5531 FAX 025-757-6998
- 印刷 株式会社 滝沢印刷

表紙と本文中の写真の一部は、(一社)十日町市観光協会及び大関義男氏からの提供を受けた。本書に掲載した写真を許可なく転載することを禁ずる。